

サウジアラビアの女性自動車運転容認問題

(株)三井物産戦略研究所 研究フェロー

(財)日本エネルギー経済研究所 客員研究員

榊原 櫻

1. 女性の自動車運転をめぐる議論が沸騰

(1) 40年来の懸案

サウジアラビアで女性の自動車運転を公式に認めるか否かをめぐって、またしても大きな議論が沸き起こっている。この問題は1970年代に提起され、一時下火になったものの、この20年間国民的な議論が繰り返されてきた。サウジは女性の自動車運転が認められていない世界で唯一の国である。認めるべきだとの主張には、認めないことが正しいとするなら世界の他のすべての国は間違っているのか、という言い方で含まれている。

(2) インターネットで運転を呼びかけた女性を拘束

今回の議論沸騰のきっかけは、サウジ東部で、女性の自動車の運転を奨励し社会秩序を乱したとして国営石油会社サウジアラムコ勤務の女性が5月21日から10日間警察に拘束されたことである。この女性は、インターネット上の動画サイトに、自分が車を運転しているビデオ映像を載せ、サウジ国内の女性に対し運転したり他の女性に車の運転を教える共同行動を6月17日にとろうと呼びかけた。彼女が東部州の都市アルホバルで車を運転する様子を撮影した映像は5月19日に投稿され、1万2,000名以上が賛同・支援の意見を寄せた。5月19日から22日までの4日間で50万回以上のアクセスがあったとの報道

もある。その後、映像は当局により削除されたが、支持者によってコピーが次々にアップされている。

なお、内務省のスポークスマンは、この女性の拘束について「コメントする立場にない。交通警察のローカル・マターにすぎない」とやや逃げ腰である。

(3) 違法とする法律はない

サウジには女性の運転自体を違法とする法律はない。換言すれば、コーランと預言者の言行録を基礎とするサウジの法は、女性の自動車運転を禁じてはいない。しかし古い宗教解釈と保守的な社会風土により運転禁止が当然視されている。より正確に言えば、運転免許が女性に対しては発給されないことから、事実上女性の運転は違法行為となっている。ただこれは都市部でのことであり、ローカル・エリアではさほど厳格ではない。ちなみに拘束された女性は米国で運転免許を取得している。

(4) 反対派の論拠は弱いが保守的思考も一部では根強い

反対派は女性の運転はイスラムのモラルに反し社会秩序を壊すと主張しているが、有力な宗教学者はイスラムでは認められているとこぞって反論している。女性の中にも、自動車運転に反対する者もいるが、自分が運転をしなければ

よいだけであり他の女性に禁止を強要すべきではないと一蹴されている。

またインターネット上に「運転している女性を見つけたら、イガール（アラブ男性のかぶる頭布を押さえる黒い輪）で鞭打って懲らしめよう」との呼びかけも登場したが、冷笑されただけであった。このように、反対派の論拠は弱く表立って賛同する者は少ないが、保守的な風土を背景に、一部では現状を変えたくないとする考えも根強い。

2. 運転容認を求める主張

(1) Women2Drive

サウジ国内では、女性グループがインターネット上に「自分の車は自分で運転する」というスローガンを掲げたページ「Women2Drive」をつくっている。ちなみに「自分の車」というのは、女性は事実上運転ができないのに自動車を買ひ、所有することは（奇妙なことに）可能であるからである。

女性グループはサウジで女性の自動車の運転が認められていないことについて、「公共交通機関が整備されていないサウジでは、女性は外出の際、家族の男性に車で自分を連れて行くよう頼むか、外国人運転手を雇うか、またはタクシーに乗らねばならない。これは、女性が一人前と見られていない証左であり、また経済的にも無駄だ」と主張している。

実際のところ、女性は自分で運転できないため、通勤にも、通学にもあるいはショッピングや病院に行くにもこの方法しかない。「サウジ女性の200万人が働いている。職場に行くために75万人の運転手を雇っている」というのが言い分である。

このグループの呼びかけは、「法を破ろうとするものでもなく、また政府当局に挑戦しようとするものでもない。ただ基本的な権利を主張するだけである。（外国の）運転免許も持っている

し、交通法規も遵守する。運転するだけである」とするものである。この運動は、体制を転覆させようとするものではなく、政府も真正面からこれをつぶそうとする気配はない。

(2) 6月17日の運転呼びかけ

6月17日に運転しようと考えているサウジ女性は多いと伝えられる。呼びかけたグループは、デモを禁じているサウジの法律に触れないよう一カ所に集まらず別々に行動（つまり運転）するように求めている。これについて、1990年に自動車運転解禁運動に加わった経験のあるキング・サウド大学の女性教授は、「グループは過去のレッスンから学んでいる」とコメントしている。1990年の解禁運動に加わって運転を行った女性は厳しく罰せられた。職を失った者も、国外旅行を禁じられた者も、またモスクでの宗教学者の説教で中傷された者もいる。

その後20年以上が過ぎ、今では多くの男性がおおびらに女性の計画を支持している。インターネット上には、運転に加わった身内の女性を守ろうという男性に対する呼びかけも見られる。

ただ諮問評議会議員の一人は、「女性たちは運転を容認する法律の制定を求めることに優先順位を置くべきであり、そろって運転することはいたずらに当局を挑発するだけで解決にはならない」と忠告している。

(3) 賛同する動き

東部州での女性の拘束の後、他の2名のサウジ女性が、彼女の行動に賛同し、インターネットのサイトに自分が自動車を運転しているビデオを投稿した。1人は、顔まで隠す黒い衣装でリヤドの住宅コンパウンドの中で運転し、同乗の女性が「おめでとう」と言っている声が入っている。もう1名はジェッダ市内を運転しているもので、男性同乗者が「右折、スピードを落

として」と指示している声が聞こえるものである。

この他にも数人のサウジ女性が、自分たちが運転している姿を写したビデオを、やはりインターネットのサイトにアップしている。

(4) 地方で普通に見られる女性の運転

なお、リモート・エリアでは、女性の運転は普通に見られる。サウジ南部のアシール地域では、多くの女性が日常生活の必要から運転を習い、毎日運転している。この地域では子供や親の学校や病院への送迎、畑や家畜小屋への往復、買い物などに、自動車運転が必要であり、女性が運転していても、奇異の目で見られたり、とがめられることはない。また、沙漠などでベドウィン（遊牧民）女性が運転するのは、当たり前のことである。

ちなみに最近のサウジ紙は、サウジ西部や南部では女性の運転が見られるが当局が制止することもなく、また何の問題も生じていないと報道している。なおサウジアラムコや大学などの住宅コンパウンド内では、女性の運転はごく普通のことである。

この5月から6月にかけて女性が運転していて当局に摘発された例は、東部州のケースのほかに3件あるが、いずれも拘束はきわめて短時間であり、再び運転しないとの誓約書にサインしてすぐに釈放されている。これは当局が運転自体ではなく、他の女性に共同行動を呼びかけたことを問題視していることを示している。

(5) 釈放と運転容認の請願

東部州で拘束された女性も、再び運転も運転の呼びかけもしないという誓約書を提出して釈放された後、彼女のイスラム信仰を疑った非難の声に反駁し、女性運転の可否については、イスラムと国民の利益を考えて、国王の判断に委ねるとのコメントを地元有力紙に発表した。こ

れは、彼女が運動を続けることはしないが、女性の運転禁止には承服していないことを示している。

彼女の拘束中は、国内外から早期の釈放を求める声が高まった。サウジ女性権利協会のメンバーが拘置施設を訪れ彼女と面会した。このグループは、女性の運転は当然の権利であり政府が早く認めるよう求めるコメントを発表した。

国外でも大きな関心をよび、あらためてサウジが女性の自動車運転を禁じている唯一の国であることを多くの人に思い起こさせた。「Human Rights Watch」は早期の釈放を呼びかけ、拘束を続ければサウジが国際的な非難と嘲笑の対象となり、国家のイメージを損ねると警告した。

また早期釈放と女性の運転を明確に認めることを求める国王あての請願書には、女性活動家、ブロガー、学者、学生など男女1,000名以上が署名した。

彼女は10日間拘束された後に釈放されたが、その後も、新聞紙上やインターネットでは、ホットな議論や論争が続いている。

(6) 運転容認を求めるここ20年の動き

1990年にリヤドで女性たちが容認するよう求めて運転を行った。当時のファハド国王は、彼女たちとその夫たちを引見し要望を聞いたが、この時期はイラクがクウェートに侵攻し緊張状態にあったために、何の決定も行われなかった。

2007年9月には女性運動家ワジーハ・ホワイダル女史ら1,100名が署名した女性の運転容認を求める請願書が王宮府に提出された。請願書は、「母や祖母たちがそれぞれの時代の交通手段を享受していたように、自動車運転は現代女性の当然の権利であり、回復されるべきだ」と主張していた。

2008年に、ワジーハ女史はやはり自分が運転している映像をユーチューブにアップしたが拘

束されなかった。なお同女史は、今回の東部州での拘束事件に関して、「社会はすでに女性の運転を受容する状態になっているのに、政府は宗教過激派を恐れている」とコメントしている。

3. 女性の社会参加と自動車運転

(1) 国王も基本的に容認の姿勢

これに先立つ2005年のアブダッラー現国王の即位後の最初のメディアとのインタビューの相手は、米国 ABC テレビの女性ジャーナリストであったが、インタビューの中で、国王は、女性を軽視することはないと強調している。国王は、ジャーナリストの、女性が自動車の運転を禁じられていることが女性差別の象徴だとの指摘に対し、「女性の権利を尊重する」と答えている。国王は、「自分の母親、姉妹、妻、娘も女性であり、自分は女性から生まれた存在である」とした上で、「女性が運転する日は必ず来る。時期が来れば必ず実現する。それまで待つ我慢・忍耐が必要」と述べている。さらに、「今でも沙漠地帯や田舎では女性が運転している」と付け加えている。

国王は、勅令を出せばすぐに実現するのではないか、との問いに対しては、「国民の意思を尊重する。国王であっても国民に受け入れられないことを行うことはできない」と答え、変化が混乱をよぶことを懸念して「国民が納得するまで待つ必要がある」と答えている。このように、国王は女性の運転を否定することなく、社会が受け入れるまで待つべきと述べている。

(2) サウジの意思決定方式

サウジの政体は専制君主制に分類されているため、政策の立案・決定は国王およびその取り巻きが（ある意味、一方的に）行うと理解されがちだが、実情はそうではない。基本はアラビア半島中央部のネジド地域の遊牧民の伝統的な考え方とイスラムの価値観・規範に根ざす「衆

議」と「合意」にある。

つまりは、どのような対応がベストであるかについて、有力者と指導者が協議（衆議）し合意を得て決定が行われる。これは協議に加わった有力者、そしてその背後に存在する多くの市民と指導者の誰もが面子を失うことなく合意を形成するため、すべての人が満足するシステムである。ただ、協議を重ねても合意が得られなかった場合には、この問題のように結論が先送りされることとなる。

(3) 女性の権利

アブダッラー現国王が即位してからは、さまざまな改革が加速化され、女性の社会参加に制限がある問題も改善の方向にある。

閣僚会議は、イスラムの間違った解釈で女性の権利が侵害されてきたと指摘し是正する姿勢を示している。2009年2月には、サウジ史上初めて女性が次官ランク（教育省次官）へ登用された。また、国費による海外留学生を見ると、学部レベルでは男子が多いが、修士課程と博士課程では、いずれも女子が過半数を占めている。

女性の自動車運転について言えば、サウジ国内でもきちんと認めるべきだとする声は、次第に高まっている。

有力な宗教学者は、女性の運転はイスラムでは原則的に認められていると繰り返し言明している。そもそもイスラムが始まったころには自動車は存在しておらず、また預言者ムハンマドの妻はラクダに乗っていたとも伝えられる。

(4) 諮問評議会も前向き

勅選議員150名で構成される諮問評議会（マジュリス・アッシューラ）でも「35歳以上、午前7時から午後8時まで」との条件付きながら認めるべきとの意見が採択されている。このように諮問評議会議員も多くが女性の運転を支持している。

諮問評議会の人権委員会の委員長は、女性の運転を禁止する法規がないことを指摘した上で、運転する権利は政府により守られるべきであり、きちんとした法整備が行われるべきであると述べている。また女性の運転はモラル低下や社会秩序の破壊につながるとの意見については、世界のどの国でもムスリム女性は（服装などの規範を守りながら）自動車を運転しており、このような考え方は、イスラム法（シャリア）とはまったく関係ないと強調している。またアブダッラー・アッシェイク議長も、6月2日、諮問評議会は女性の運転問題を議題とする用意があると言明している。

(5) 改革と保守層の抵抗

サウジは、近代化・現代化したのが石油ブームの起きた70年代以降と比較的最近であるため、国民の間では保守的な考え方が依然として強い。国王などリーダーシップは、改革を進めなければ近代国家としての発展が望めないことを認識している。ただ同時に、「衆議」と「合意」を欠く改革が国内に混乱と摩擦を引き起こすことも懸念している。

(6) 国民意識も変化の方向へ

サウジは物質的には欧米化、国際化している。国外の情報も、良きにつけ悪しきにつけ、一般国民に広くもたらされている。サウジは外部からはアクセスが難しいが、サウジ人が外部に接触することはほぼフリーである。サウジはアラブ世界で最もインターネットが普及している。多くの国民が、世界中の放送を数百チャンネル以上視聴できる衛星テレビを楽しんでいる。さらに国外への留学経験者、留学中の若者も多い。社会は石油収入のお蔭で豊かである。国民が、外国に旅行したりインターネットや衛星テレビを通じて、外国の情報に接することに障害はない。

厳しかった国内メディアに対する規制・制限も緩和され、多くの意見がオープンに報道されるようになってきている。世界の事情を広く知り自由なメディアを持った国民の意識は変化しつつある。またサウジの人口構成は急速に若年化している。若年層は伝統にとらわれない。これらを考えあわせれば、国民の意識は国王の懸念よりも先に行っているかもしれない。

(7) メディアの論調

国内メディアは、総じて女性の運転を支持している。王族が経営する有力紙は、ジェッダ市内で運転した女性とのインタビューを掲載し、支持の姿勢を示している。実名でインタビューに登場した女性は、運転は普通の権利を行使しただけで当局にとがめられることもなかったし、道行く人たちもよいことだとの反応を示していたと語っている。彼女は、禁止するならそういう法律を作るべきだとも述べている。

別の有力紙は、イスラムは女性がラクダや馬に乗ることを禁じていない。自動車も同様である。これは宗教の問題ではなく政治の問題であり、ボールはリーダーシップのコートにあると書いている。そしていまや社会は受け入れる状態になっているのになぜ決定されないのかと政府をプッシュしている。

(8) 女子教育との対比

女性の運転問題の今後を考えるに際し、女子教育の進展の状況も参考になる。かつてサウジでは女性が教育を受けることや働くことについて拒否反応があった。しかし今では、それらのごく当たり前であり、父親や男兄弟が支持していることである。

社会の変化の過程で、女子教育も進展した。第二代サウード国王は女子のための学校を開設することを決めた。第三代のファイサル国王は、女性に教育は不要であり、むしろ有害であると

する宗教界の反対を抑えて、この政策を実行に移した。宗教界の反対が強かったため、当初、女子学校は軍が警備していたほどである。そして今年になって、第六代の現アブダッラー国王は、毎年6万人の学生を受け入れる医学と理工系を主とする「プリンセス・ヌーラ・ビント・アブドルラハマン女子大」をオープンした。ただこれは女子教育を発展・充実させるものであっても、(男女共学を通じた)男女平等という理念からはかえって遠ざかるものかもしれない。

これに先立って、現国王は、自分の名前を冠したサウジで最初の男女共学の大学院大学「キング・アブダッラー科学技術大学」を2009年にオープンしている。

4. 自動車運転容認は時間の問題

女子教育の歴史を考えると、遙けくもよくここまで来たものだと思われる。何事についても、新しいことには反対し拒絶する人達がいる。これはサウジに限らず、保守的な社会に共通である。女性の自動車運転は、他国ではごく普通のことである。湾岸の他の諸国ではモスレム女性が運転している。サウジ女性でクウェートやバーレーンに住んで運転している者も多い。

この問題は70年代から長期にわたり議論されてきたが、いまだに何のアクションもとられて

いない。その間、サウジはさまざまな近代化を進めた。女性の社会的な役割も大きくなった。にもかかわらず、女性の運転容認問題は放置された。本来簡単なことなのに時間の経過とともに難しい問題と化した。

女性の本当の社会参加がなければ、サウジ社会の発展は望めない。女性は社会を構成する一部である。自動車運転を含め、女性を社会にフルに参加させることは、経済的に見ても意味あることであり、国家の発展にもプラスとなる。女性を必要としない分野は存在しない。サウジの女性は能力があり、教育程度も高い者が多い。多くの分野で活躍が期待される。女性が移動手段を手に入れても、それが社会を壊したり文化やモラルを変えることなどない。

国民の意識も大きく変わっている。「衆議」と「合意」で女性の自動車運転を容認する時期が近づいていることは誰も否定できない。これまで先送りの理由とされてきた「社会がまだそれを受け入れる状態になっていない」はもうあり得ない。今やきちんとすべき時期となった。

問題は認めるか否かではなく、何時認めるかである。今年でなければ来年、来年でなければ再来年。これを超えて禁止が続くことはあり得ない。とにかくいずれそうなる。これは多くのサウジ人が感じているところだろう。